

みんなの民放史

題字 中川 順

サウジアラビアの放送局開設に携わって

第4次中東戦争に揺れた8ヶ月

加藤 卓たかし
(TBS)

1973年8月3日午後8時にレバノンの首都ベイルートを発ったサウジ航空735便は、間もなくサウジアラビア王国の東部の街ダーランに着陸しようとしていた。

それまで窓外には暗闇が拡がっていたが、機体が大きく高度を下げ耳に痛みを感じた時、いくつもの赤くゆらぐ炎が目に見え込んできた。それが石油採掘サイトから生じるガスを燃す炎だと判った時、私のサウジアラビア王国リヤドラジオ放送センター建設の現地での仕事の始まりを実感させられた。

このプロジェクトは、サウジアラビア近代化政策の一環としてアメリカの故ケネディー大統領が援

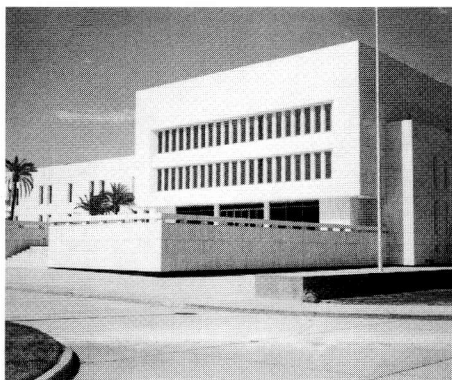
助を約束したもので、国際入札に日本から機材メーカーと商社の四社連合チームが応札して一番札で落札したものだ。

この連合チームに東京エレクトロンが参加していた。当時同社は、TBSの技術局長だった遠藤幸吉さんが社長だったことからTBSに要請があり、思いもかけず私が担当を命ぜられた。

この年の3月には、すでにサウジアラビア王国情報省から10名の研修生が来日して2ヶ月間のトレーニングを受けていた。

メーカー各社の工場で製造されている機器の説明およびTBSラジオスタジオでの実機取扱い訓練などである。

研修生の帰国後、機器据付工事が現地入りして、イタリアの会社が担当した総大理石造りの局舎の完成が近づいていた。私は完工後の引渡し以降6ヶ月の保証を担当する任務を与えられていた。



総大理石造りのラジオ局舎

予想外の電源事故

サンリの恐怖!?

8月4日午前0時15分街路灯の輝くりヤドに無事到着。タラップを降りると深夜にもかかわらずむっと熱気を感じる中で、仮設の荷物引渡し場の外から「加藤さん」と呼ぶ声が聞こえた。先行していた工事隊の中島・山本両氏が出迎えに来てくれたのだ。

東京を7月31日に発ち、ベイルート乗換えて5日目に目的地を踏んだ。安堵感が全身を包む。

翌日から忙しい日程が始まった。まず、東京で取得した二週間滞在のビザの更新を行うべく情報省に着任の挨拶をし身分証明の発給を受けて、入国管理事務局へ出向き、2ヶ月間ビザを取得できた。

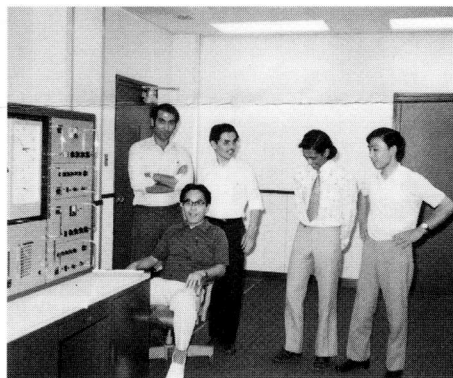
6ヶ月の保証契約が結ばれているのでビザが切れる前に一度カイロかベイルートに出国してビザを再取得するようにとの指示があった。このため思わぬ国外旅行の機会を与えられ、その後エジプトとレバノンを数回往復する事になる。

しかし良い事ばかりではない。

10月5日、ビザ退避でカイロ、ベイルートと回りサウジ西海岸の都市ジエッダに一泊、翌6日にリヤドに帰着すると、まだ使用開始前のスタジオの駐車場に情報省の車が多数止っている。私の顔を見て局員が一斉に大声で喚き出した。手を引張って「電源棟へ行け」と言う。現場に駆けつけると焦げ臭くて、非常灯がほんのり点灯しているだけで照明がすべて消えている。非常用発電機は回っていないし、市内の発電所から配電されて

いる13万ボルト超高圧も異常は無い。暫くして分電盤のひとつがひどく損傷しているのを発見した。中を見ると体長15センチほどのサソリが二匹黒焦げになっている。接続ケーブルも焼け焦げていて、絶縁不良とブレーカー類の損傷も激しく、通電不可能は明白だ。

さらに局員が告げる「きのう中



スタッフの引継ぎ・中央 加藤氏

東戦争が始った」。サウジもエジプト、シリアと共に正式に宣戦布告をしたという。おまけに前週の9月27日から1ヶ月のラマダンに入っているから日中の飲食は一切禁止である。正に三重苦が一度に押し寄せてきた。

この時すでに工事隊は帰国した

後で私一人が残っていた。とにかく、電源の回復のため在リヤドの米工兵隊の専門家チームに応援を依頼する。翌日数名の技師が来局し、あり合せの部品を使って修理をしてくれた。その間に、局員の手で非常用発電機を操作し緊急送電を行いホッと胸を撫でおろした。

第4次中東戦争

身辺の安全を確保せよ

もうひとつの大問題「第四次中東戦争」の方は、局員たちの話では緒戦でアラブ側が大勝利とのこと、しかし私は大本営発表を体験している年代だけに一抹の不安を禁じ得ずBBCの地中海中継短波放送のニュースを聞くなどして、情報の確度を上げる努力をした。

当時リヤドには、外国大使館、商社事務所は全く設置されていなかった。局前のテレビ通りにあるアラビア石油在リヤド事務所と電話連絡を密に行っていた。リヤドの在留邦人は、アラビア石油の家族を含め数名のみであった。

二週間ほど経ち、東京からの指令が届いた。「身辺の安全を確かめベイルートへ出国し、JNNパリ支局長の原氏(ABC)」と

合流して様子を見よ」。

前回ベイルートで取得したビザが一ヶ月と短期のものだったのでビザ退避も兼ねて10月24日夕刻の便でベイルートに向け出発した。通常なら二時間ほどでベイルートに到着するのに、この日は戦争地域を避けてクウェート、イラン、トルコ、キプロスの上空を迂回して四時間以上の飛行となった。

ベイルートのリビエラホテルで原氏と合流し、カイロ等への移動手段を探すのが海空路共に運行停止状態であった。

この間、ベイルート市内にも空襲警報が鳴り響く日もあったが、はるか遠くの高原が攻撃されているのが散見される程度であり市内は至極平静だ。10月27日はラマダン月が明けられるので市民の表情も明るく感じられた。

ビザの更新は戦争中なので二週間ビザのみと言われて困惑したがやむなく11月1日リヤドへ帰った。サウジで聞く

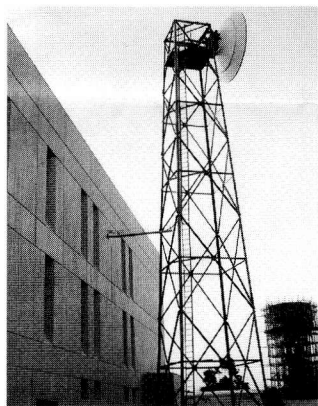
トイレットペーパー騒ぎ

新しいスタジオは、日本で研修を受けた10名の若者を中心に日々操作訓練が進んでいた。

送信所はフランスの手ですでに4年前に完成していて、中波1200kw、短波350kwの体制が整っている。中波とFMは旧スタジオから放送をしていた。次の段階として、現用スタジオのスタッフにも新設スタジオ施設の運用・保守の訓練を実施して欲しいと要請があったので、東京へその旨を伝え、これに応えるための交渉を開始した。

この頃、日本からの便りが石油価格急騰を知らせてきた。一バレル3米ドルだった原油が四倍の約12米ドルまで上昇したとのこと、それが何を意味するのか即断できなかった。

スタジオのSTリンク鉄塔からアンテナ用ケーブルを引き込み、短波用受信機でラジオジャパンの毎正時からの日本語ニュースを聞



く。曰く「トイレットペーパーの買溜め」「練炭火鉢が大売れ」等々の耳を疑う話の続出で日本の近未来がどうなるのか不安な日々を過ごした。次期トレーニングの交渉役で東京から来た人の話で、それらが現実であると聞き石油輸出の真ん中にいる自分を考える複雑な心境であった。

そんな日々、局員たちが「日本のタンカーに石油を積んで帰している」と私に話をして、多少でもこちらの気持ちと和むよう努めてくれているのが嬉しかった。

11月14日ビザ退避のためベイルートへ向かう。これより先に東京からJNNベイルート支局開設の報せが入っていた。山陽放送の片山健氏(故人)が支局長として赴任されリビエラホテルに滞在中とのことであった。このホテルには日本人経営のレストランがあり在留邦人会の集合場所になっていた。多くの商社や報道関係者間の情報交換が行われていた。ソファに片山氏が座っていた。初対面の挨拶と共に日本を遠く離れた地での出合いの不思議に話が及び協力を誓い合った。

リヤドへ帰る前に、片山氏と隣



現地スタッフの研修・中央 加藤氏

国シリアの首都ダマスカスへの日帰りドライブに行く。第四次中東戦争が終結したばかりのダマスカス市内は、あちこちのビルが無残に破壊されていて近代兵器の残骸を実感させた。

三木特使来る

報道連絡回線の確保を急ぐ

11月も下旬となると厳しい猛暑も終り日中の気温は25度C程度となり、湿度も極めて低く過し易い気候となった。スタジオのチーフとしてカール君が赴任してきて

諸設備の説明に連日時間を費やすようになる。彼は、アメリカ留学帰りのエリートで、奥さんはアメリカ人。FMラジオ局の英語番組を担当している女性アナである。

情報省がトヨタの四輪駆動車を専用車として提供してくれ、彼が運転して私を送迎するというので連日お世話になる事にした。それまではタクシーだったが、メータも無く乗車する毎に料金交渉を強いられ法外な料金を吹っかけられる事もあった。

12月に入り短波送信機のテストを行いたいののでスタジオからプログラムを出して欲しいとの要請があった。早速TBSから送つてもらっていたテープ素材を連日流した。中近東では、短波による周辺地域への放送が盛んでカーラジオにも短波帯の受信機が組込まれている。日本のプラント建設現場で聞いている人やアラビア石油の方々からテスト放送を聞いたとの電話もあり、まずは大成功と喜んだ。

ハッジ生中継と

バンド収録の成功に一安心

12月6日アラビア石油事務所に

ジェッダの日本大使館から大使と理事官が来訪されたとの連絡が入り、翌7日朝打合せをしたいとの事である。同じ日、東京から電報が入って三木副総理一行が11日にリヤドを訪問するというものであった。同行記者団12名も一緒に日本との連絡回線の確保を希望していた。飛び込みで通信省へ出向くとすでに情報省から連絡があったとの事で話が意外とスムーズに進み二回線を4日間専用線として貸与するとの許可が出た。

話が一段落したとき、担当者の一人が机の引出しから一枚の写真を取り出して私に見せた。その年の春日本で研修をした情報省の若者と私が写ってるものであった。驚く私に彼が言った。「この写真の研修チームリーダーだったバギー君はリヤド大学の同級生だ」と。何と言う偶然！思わず目頭が熱くなった。「シヨコランゲジラ」。シヨコランは「感謝」、ゲジラは「アラビア半島」を意味する。現地の言葉で最大級の感謝の辞を述べて別れた。

三木特使来訪を明日に控えての準備が進む。通信省の技師も同行して記者用の宿舍となるヤママホ

テルの特別室に専用電話の設置を完了。テストに TBS ラジオマスターにその場からダイヤルして呼び出してくれた。専用電話は二回線だったので記者団用と特使随員用にそれぞれ一台を振り分けた。

後日判明した事だが、この回線はリヤドから東海岸のダンマンまで VHF 回線で結び、沖合いの隣国バーレーンから衛星に打上げて日本まで伝送するという特別な回線であった。

11 日午後 3 時 10 分、三木特使が到着。王室からファアド皇太子殿下が出迎え迎賓館に向う。この模様は私の愛用の 16 ミリカメラで撮影しベイルートの片山支局長経由で TBS へ送った。

12 月 25 日、今日からイスラムの巡礼「ハッジ」の始まりである。周辺諸国からメッカを目指して巡礼団が訪れる。年間を通じて最大の行事であるので放送は五交代の連続放送体制となる。

メッカのカハバ神殿やメジナの聖地から放送波リレー方式で中継生放送を行う。リヤドからは、新鋭の短波送信機で 350 kw 三波を流す。この電波は、マレーシア、インドネシア、フィリピン等のイ



機器の取扱い説明

スラム圏に届くはずである。日本でも受信可能と聞いた。

12 月 31 日大晦日である。リヤド郊外 25 キロで精油所建設中の千代田化工建設のサイトで餅つきをするとの招待があった。局員のマーディ君とオマル君を誘って出かけた。

本格的な臼と杵を使って、かけ声よろしく元気に餅をつく風景に二人も飛び入りで餅をついた。日本式にいろいろと味付けされたライスケーキは結構彼らの口に合ったようで、何個もお替りをしてい

るのが微笑ましい光景であった。
1 月 3 日には、アラビア石油リヤド事務所で新年会が催された。お正月といっても、サウジは禁酒国なので酒は一切無しの食事会である。

一方、局の方では、ハッジの特番リレー送出が続いていた。情報省幹部が黒いトープをまとった正装で見守っている。時期が丁度日本の正月と重なり、こちらも緊張感を味わいつつ中断事故の無いよう祈った。

1 月 9 日、ハッジ中継が終了した時点で情報省技術局によるスタジオのチェックが始まった、毎日各スタジオの機能を確認する作業が続いた。

12 のスタジオとマスターのチェックが終了すると今度は、実際に録音をとる作業に移行し、アラビックバンドを収録する事になった。第一スタジオに 10 数名のバンドマンが登場。編成は、大、中、小の太鼓のリズム楽器にヴァイオリン、アコーディオン、笛、カヌーンという金属の弦をたたく楽器などである。テープに収録し、コピーを情報大臣宛に託したところ、翌日、大臣がスタジオに現れ

謝辞を述べられたので局員たちから拍手が起り、スタジオの空気は最高に盛り上った。余勢をかって次々とスタジオでのテスト収録が続く。最も大きい三百席の観客席とステージを持つホールの運用テストも現地スタッフの努力で無事に終了する事ができた。

この間に保証契約が10ヶ月に延長された。

忘れえぬサウジ

人々との心の交流

2月1日、局員のアリフィー君の結婚披露宴に招待された。夜8時彼の家の前の空き地にじゅうたんが敷かれ多数の裸電球が輝く会場に100人以上の男ばかりが座っている。お香の鉢が何回も手渡しで回ってくる。

やがて食事が始まる。私の前にも大皿に乗った羊の頭と胴が置かれた。眼球を掘り出して食べると勧める。鯛の頭を思い出して口に入れると同様の食感であった。次は、舌、その次は脳と順番に食べたが気持ちの悪さと、反対に食感は決して悪くない。アラビアの人々が遠来の客を厚くもてなすとはこういうことと実感できた宴であった。

蛇足だが新婦の姿は見るべきでなかった。

2月16日、新設のホールでガルフテレビ会議が催されるので局員一同準備に余念がない。すべてのオペレーションを自分たちで行うよう指示したが、それを皆で一生懸命で見事にやり遂げた。

帰国が近づいた3月8日金曜日の休日にリヤドから数10キロ離れたドレイブというオアシスにピクニックに誘われた。局員全員が集まっている。どうやら私の送別会らしいと気づく。

スーク(市場)に立寄り小羊を一頭買い、生きたまま車に積んでオアシスへ向う。ドレイブには、湧水の豊かなオアシスは、そこだけ緑の園である。水の豊富な日本をありがたいと痛感した場面であった。局員の一人が生きた小羊を料理すると言って、小形ナイフ一丁で皮をはぎ首を落す様子を16ミリフィルムに納める。帰国後TBSで放送してもよいとの事であったが、今もライブラリーで寝ている。

3月23日ようやく帰国許可が出たので、ジェットとベイルートに立寄り関係者に挨拶をして帰国の

途についた。

私たちの作ったシステムは、その夏に稼働した。施設の完成だけではなく、技術的なフォローをしたお蔭で、現地の技術者だけで運用出来るようになっていたのが嬉しい。

リヤドラジオ局入札から30年を経た今日、私は国際協力案件のコンサルタントとして西アフリカの国営ラジオ局ほかの放送海外支援に参加している。



本番中の現地スタッフ